

いちばん美しいアフォリズム

「プロレタリアートのこの上もない寛容さとは、これである——自らに敵対する者たちを根絶やしにするのではなく、彼らに対して道徳的な影響を及ぼそうと努力するのだ」(レーニン)。

304 主体性と真理

今年度の講義の内容はやがて公刊することになっている。したがって目下のところはその短い要旨を与えるに
とどめる。

「主体性と真理」という一般タイトルのもとにめざされているのは、自己認識の制度化された様式およびその歴史について調査を開始することである。どのようにして主体は、制度のさまざまな時期およびさまざまな文脈において、可能な認識の対象、望むべきあるいは不可欠でありさえする認識の対象として打ち立てられてきたか？ どのようにして、自己についての経験、その経験についてひとが形成する知は、一定の図式をとおして組織されてきたのか？ どのようにしてそれらの図式は決定され、価値づけられ、推奨され、押しつけられてきたのか？ このような研究においては、起源的な経験に訴えることも、魂、情念あるいは身体に関する哲学的学説の研究も、主要な軸として役に立つわけではないことは明らかである。こうした調査にとって最も役に立つと思われる導きの糸は、「自己の技術」と呼ぶことができるような、おそらくはすべての文明に存在するであろうような手続きを手がかりとすることである。「自己の技術」の手続きは、人々に対して、幾つかの目的に応じて、自分のアイデンティティを固定したり、維持したり、変形したりするべく提案されたり処方されたりするものであり、自己に対する自己の統御、あるいは、自己による自己の認識という関係にもとづいている。要するに、

「主体性と真理」、『コレージュ・ド・フランス年鑑』、八一年次、「思考システムの歴史」講座、一九八〇—一九八一学年度、一九八一年、三八五—三八九ページ。
《Subjectivité et vérité》, *Annuaire du Collège de France*, 81^e année, *Histoire des systèmes de pensée*, année 1980-1981, 1981, pp. 385-389.

私たちの文明に極めて特徴的なものと思われる「自己自身を知る」という至上命令を、明示的であるか否かはともかくその文脈となつていられるもつと広範な問いかけのなかに位置づけ直してみることがめざされるのである。その広範な問いとは、すなわち、自己自身をいかに扱うか？ 自己についていかなる作業を行うか？ といった問いであり、また、次のような活動をおこなうことはいかに「自己を統治する」のか？ という問いでもある。すなわち、その活動においては、自己自身が、活動の目標であり、活動が行われる領域でもあり、活動が依拠する道具でもあり、また活動する主体でもあるような活動である。

プラトンの『アルキピアデス』^{*}を出発点と見なすことができる。「自己自身の関心」——epimeleia heautou——の問題は、このテキストにおいて、その内側で自己認識の至上命令が意味をもつことになる一般の枠組みとして現れる。ここから出発して考えうる一連の研究は、経験および経験を練り上げたり変形したりする技術として理解される「自己自身の関心」の歴史をかたちづくることになるかもしれない。この計画は先行して扱われた二つのテーマの交点に位置している。すなわち、主体性の歴史と、「統治性」の諸形式の分析である。主体性の歴史は、狂気や病気や犯罪の名において社会の中で行われる諸々の分割、および、そうした分割が理性的で正常な主体の構成に及ぼす諸影響を研究することによって企てられてきた。主体性の歴史はまた、ことば、労働そして生命に関する知のような諸々の知における主体の客体化の諸様態を研究する試みによっても企てられてきた。「統治性」の研究の方は、二重の目標に込められていた。すなわち、「権力」の通常的な概念（漠然とであれ、権力の源泉でもある一個の中心をもち、その内在的力動によってつねに拡張しつづけるような傾向をもつ統一的なシステムとして考えられる権力）の必要な批判をおこなうこと、そして、それとは反対に、権力を個人間や集団間の戦略的な諸々の関係性の領域として分析することである。その諸々の関係性とは他者あるいは他者たちの行動を掛け金とするもので、場合によって、あるいはそれらの関係性が展開する制度的枠組みによって、あるいは社会グループによって、あるいは時代によって、それぞれ違った手続きおよび技術に訴えるものである。すでに刊行済みの監禁および規律についての研究、国家理性および「統治の技術」についての講義、A・ファルジュ

と共同で刊行が準備されている封印状に関する研究が、この「統治性」の分析を構成する要素となる。

自己の「関心」および自己の「技術」の歴史はしたがって、主体性の歴史をおこなう一つのやり方ということになるのかもしれない。しかしながら、それはもはや、狂人と非狂人、病人と非病人、犯罪者と非犯罪者との間の分割を通しておこなわれるのではなく、生ける主体、語る主体、労働する主体に場を与える科学的客観性の場の構成を通して行われるのではない。それは、私たちの文化における「自己自身に対する関係」の成立と変容を、その技術的な骨組みと知の諸効果とともに研究することを通して行われるのである。そのようにして、別の側面から、「統治性」の問題を再び取り上げることができるともいえないのである。すなわち、(教育、行動指針、精神指導、生の模範の訓示などに見られるような) 他者との諸関係と分節された、自己による自己の統治の問題である。

*

本年度行われた研究はこうした一般的な枠組みを二通りの仕方限定した。まず歴史的な限定である。ギリシヤおよびローマの文化において、キリスト紀元前一世紀から紀元後二世紀にいたる時代に、哲学者、道徳家、医者たちの間で「生の技術」、「生活の技術」として発達したことが研究の対象となった。対象領域の限定も行われた。それらの生の技術はギリシヤ人たちがアフロディシア (aphrodisia 愛欲) と呼んだタイプの行為に適用される場合に限って考察された。アフロディシアの行為に対しては、われわれの「性(セクシヤリテ)」の概念はまったく不適合な翻訳でしかない。提起された問題とはすなわち次のようなものである。いかにして、哲学

* プラトン『アルキピアデス』(仏語訳 M・クロイゼール)、レ・ベル・レットル社、「フランス大学叢書」、一九二五年刊。

** フーコー(M)、ファルジュ(A)『家族の混乱——パスチュー・アーカイブ十八世紀の封印状』、パリ、ガリマール・ジュリヤール社、「アーカイブ」叢書、九一号、一九八二年。

的および医学的な、生の技術は、キリスト教の発達の前後において、性的行為の実践——クレシス・アフロディシオン (khrēsis aphrodisiōn 愛欲の活用) ——を定義し規制したのかという問題である。古きよき抑圧の仮説と(いかに、また、なぜ、欲望は抑圧されるのか? という) おきまりの問いをめぐって組織されるような性の歴史からは遠く隔たったものであることは分かるであろう。問題とされるのは、生の技術をおした自己の形成であって、禁止と掟による抑圧ではないのである。いかに性が遠ざけられてきたのかを示すことがめざされるのではなく、私たちのそれぞれの時代の社会において性と主体とを結びつけてきた長い歴史がいかなる端緒を持つたのかを示すことがめざされるのである。

これこれしかじかの時期に、性的行為に関する「自己自身の関心」の最初の出現を結びつけることはまったく恣意的なことであるかもしれない。しかし、(キリスト教に直接先立つ数世紀における自己の技術をめぐって) ここで提示された時代区分にはその根拠がある。じつさい、「自己の技術論」——生の様式、生活の諸選択、自らの行動を規制するやり方、自己自身にむけて目的と手段とを課すやり方などについての省察——が、ギリシャ、ローマの時代においては非常に大きな発達をとげ、哲学の活動のかんりの部分を吸収するにいたったことは確かである。この発達は、都市社会の成長、権力の新たな分配、ローマ帝国において役人の新しい貴族階級が重要なものとなったことと切り離すことができない。この自己の統治は、それに固有な技術とともに、教育制度と救済宗教との「あいだ」に位置している。この「あいだ」という表現で、たとえ古典ギリシャにおいては未来の市民の教育の問題がより多くの関心と省察を呼び起こし、より後代においては来世と彼岸の問題がより多くの不安を呼び起こしたとしても、年代順的な継起関係と理解すべきではない。あるいはまた、教育、自己の統治そして救済が、完全に区別され、それぞれ異なる概念と方法とを働かせる三つの領域を構成していたなどと考えるべきではない。じつさいには、それらの間では、多くのやりとりがあり、確実に連続性が存在していた。とはいえ、成人に向けた自己の技術論は、教育制度や救済宗教の威光がそれを覆い隠してしまった影を取り除くことができれば、その固有性とこの時代においてそれが獲得した規模において分析しうるのである。

そしてまさしく、ギリシャ、ローマ時代に発達したこの自己の統治は性的行為の倫理とその歴史にとって重要である。じつさい、極めて永い歴史をもつことになったあの有名な夫婦図式の原則が定式化されるのは、——キリスト教においてではなく——ここにおいてなのである。その図式とはすなわち、配偶者間の関係以外のあらゆる性的活動の排除、快楽の目的を排し性的行為の生殖としての目的化、夫婦関係における性的関係の情緒的機能からなるものである。しかしそれだけではない。性的行為およびその効果に関するひとつの心配の形式が発達するのにも、あまりにしばしばキリスト教のせい(資本主義や「ブルジョワ道徳」のせいではないとして!)であると思われるが、それもまたこの自己の技術論においてなのである。確かに、性的行為の問題はまだ、のちにキリスト教における肉と肉欲の問題群におけるような重要性をまったく持っていない。例えば、怒りや不運の問題の方がギリシャ、ローマの道徳家にとっては、性的関係の問題よりもはるかに多くの場所をとっている。しかし、その位置が、関心事項の順序において最重要関心事項からはるかに遠いとしても、それらの自己の技術が、性的行為の統制を生活の全体に結びつけているやり方に注目することは大切なことである。

*

本年度の講義では、以上のような自己の技術の四例を愛欲(アフロディシア)の節制との関係において取り上げた。

(1) 夢解釈。アルテミドロスの『夢判断』、第一の書、七八章から八〇章が、この領域では基本的な資料である。そこで問われている問いは直接に性的行為に関わるものではなく、むしろ性的行為が表象されている夢の使用法に関わっている。このテキストにおいては毎日の生活においてそれらの夢にどのような予言的な価値を与え

* アルテミドロス『夢を解く鍵。夢判断』(仏語訳、A・J・フェステュジエール)、第一の書、七八—八〇章、パリ、ヴァン書店、一九七五年、八四—九三ページ。

たらよいかを決定することが問題なのである。夢がこれこれしかじかのタイプの性的関係を示したことによって、どのような吉あるいは凶の出来事を予期しなければならないかというのである。このようなテキストは明らかに道徳を説くものではない。そうではなく、このテキストは夢のイメージに与えられる肯定的あるいは否定的な意味作用の働きを通して、(性的行為と社会生活のあいだの)さまざまな相関関係の働きおよび、(性的行為を相互に序列化しつつ)示差的な評価のシステムを明らかにしようとするのである。

(2) 医的節制。これは直接的に性的行為に対して「節度」を決めようとする。この節度が実際的には性的行為の形式(自然であるかそうでないか、正常であるかそうでないか)に決して関わることなく、性的行為の頻度および時機に関わるものであることは注目すべきである。量的および状況的な変数のみが考慮に入れられている。ガレノスの大理論体系の研究は、医学および哲学の思想において性的行為と個人の死とのあいだに結びつきが打ち立てられたことを示す。(それぞれの生者は死を定められているが、種は永遠に生きねばならないがゆえに、自然は性的再生産のメカニズムを発明したというのである)。この研究はまた、性的行為と、それがもたらす生の原理の暴力的かつ極限的で危険な消尽とのあいだに結びつきが打ち立てられたことも示している。固有な意味における節制(エフェソスのルフス、アテナイオス、ガレノス、ソラヌス)の研究は、それが推奨する無数の注意事項をとおして、性的行為と個の生とのあいだに複雑かつ細やかな関係性が打ち立てられていることをしめしている。性的行為はあらゆる外的および内的状況に応じて有害なものとなりうるものであり、それぞれの性的行為が身体のあらゆる部位と構成要素に及ぼす影響は巨大なものであるとされる。

(3) 結婚生活。この時代には、結婚に関する論考は多数存在している。ムソニウス・ルフス、タルソスのアンティパトロス、ヒエロクレスの残存する論考、プルタルコス¹の諸著作は、たんに結婚の価値重視(歴史家によれば社会現象に対応するようである)ばかりでなく、婚姻関係の新しい考えを示している。「家」の秩序のために必要な両性の補完性という伝統的な原理に、両配偶者の生の全ての側面を包み込み、決定的に個人的な感情関係を打ち立てるような、二項関係の理想が付け加えられたのである。この関係においては、性的行為は専有的な場

所を持たなければならない(夫の特権に対する侵害としてではなく、夫と妻を同様に縛る結婚関係を侵害するとして、ムソニウス・ルフスによって、姦通は断罪されている)。性的行為はまた生殖に関連づけられていなければならない、というのも生殖こそが自然が結婚に与えた目的だからである。性的行為はまた、羞恥、お互いの優しさ、相手の尊重が要請する内的な規則性に従うものでなければならない(この最後の点について、最も数多く見た最も貴重な指摘が見いだされるのはプルタルコスの著作である)。

(4) 愛の選択。二つの愛——女性への愛と少年への愛——のあいだの古典的な比較に関しては、この時代、二つの重要な著作が残されている。プルタルコスの『愛にかんする対話』と擬ルキアノスの『エロス論』である。^{**}これら二つのテキストの分析は、古典時代がよく熟知していた問題が永続していることを証す。すなわち少年愛の関係性における性的関係にステータスと正当化を与えることの困難性の問題である。擬ルキアノスの対話はアイロニカルに、少年のエロス論が友情や美德や教育の名において回避しようとしたそれらの性的行為を喚起することとで終わっている。プルタルコスのより詳細なテキストは快楽への合意の相互性をアフロディシア(愛欲)における本質的な要素として浮かび上がらせる。かれは、こうした快楽における相互性が男と女とのあいだにおいてのみ存在しうるものであること、それが結婚の契りを定期的に更新することに役立つ結婚生活においてはさらにそうであることを示している。

* ムソニウス・ルフス(C)『断片』Ⅷ：愛欲について、O・ヘンゼ編、ライプチヒ、B・G・トイブナー書店、「ギリシア・ローマ著作叢書」一四五番、一九〇五年、六五—六七ページ。

** 擬ルキアノス『エロス論』五三節(英訳 M・D・マックリオード)、『著作集』、ロンドン、オエブ古典書店、四三三番、一九六七年、二三〇—二三三ページ。プルタルコス『愛にかんする対話』七六九節b(仏訳、R・ファセリエール)、『道徳論』、パリ、レ・ベル・レットトル社、「フランス大学叢書」、一九八〇年、第十巻、一〇二ページ。